

# 翻訳上より見たる因縁の語義について

—法華経英訳覚え書—

村 野 宣 忠

因縁という語を翻訳する場合次の語義が考えられる。

① 原因を意味する場合。**Cause**。因と縁とを分けて訳す場合は因は **primary cause**、縁は **environmental cause** と訳すことにしている。例、如是因如是縁。十二因縁の場合も **the twelve causes** と訳すことにしている。通常これは **the twelve links of causality** と訳されているが、**causality** は因果関係を意味する。十二因縁は因果関係を表現するから **causality** でもよいわけであるが、十二因縁という語そのものには果は表現されていない。

② 理由を意味する場合。**Reason**、理由とはある事柄を説明する場合に役立つ事実をいう。これは問答の場合は **why—because** の形となる。例、以何因縁（**why**）而有此瑞。以是因縁（**Because of this = therefore**）地皆嚴淨。

③ 動機を現わす場合。 **motive**。動機とは人をして行動を起さしめる事実をいう。序品に我見彼土恒沙菩薩種々因縁而求仏道とあるが、この因縁は動機と解すべきではないかと思う。

④ 目的を意味する場合、**Purpose**。目的とは人がその実現を意図するものをいう。唯以一大事因縁故出現於世の因縁は目的と解すべきものと思う。

⑤ 仏や仏弟子などの過去世における因縁物語を意味する場合、**the story of a previous life**。種々因縁譬論言辭の因縁はこれに当ると思う。

この場合本事も本生も含まれると思う。前生物語は一種の life-story である。たゞ異なるところは現世の story ではなくて前世の story である点である。前世は previous existence 又は previous life の訳語が一般に採用されている。prenatal life は胎内の生命を意味するのが本義であるから避くべきであろう。そこで前生物語を意味する因縁を the story of a previous life としたのであるが、本事も本生も含まれているから本事本生の訳語と同様になる。即ち本生は the story of the previous life of a Buddha であり、本事は the story of the previous life of a Bodhisattva となる。例えば薬王菩薩本事品の品名は the previous Life of the medicine-king Bodhisattva とした。但し妙莊嚴王本事品の本事は妙莊嚴王の本事ではなく華徳菩薩の本事であるから、単に the story of king wonderful-adornment とした。

⑥ 九部経の一である因縁を意味する場合。方便品に或説修多羅伽陀及本事本生未曾有亦説於因縁譬論並祇夜優婆提舍経とある中の因縁は前生物語即ち過去世の因縁談の意味の因縁ではない。因縁談にあたるものは本事本生である。九部経の一としての因縁は仏が経や律を説かれた由来を明かにしたものである。従ってその訳は the reason why the sutra is expounded とすべきであろう。この意味内容が明らかな場合、又は註釈を付する余裕のあるときは Introductory discourse 又は単に Introduction とすることもできるであろう。

これに関連して諸賢の御高見を煩わしたいことがある。前節で言及した種々因縁譬論言辭のなかの言辭とは何か。因縁も譬論も言辭を離れてはない。もしこれが単に言葉の意味するならば譬語（ゼイゴ）である。言辭柔軟の言辭はあきらかに音声の意味するが、音声や言葉は因縁や譬論と併置さるべき性質のものではない。しかるに因縁譬論言辭の言辭が単なる贅語でないことは以種々因縁譬論亦言辭の表現を以てしても明らかである。

そこでこの言辭は優婆提舍經を意味するのではないかと思うのである。九部經のうち修多羅と伽陀と祇夜は形式上の分類であつて内容には關係はない。他の六部經のうち未曾有は現前の事實として与えられるものであり、仏の教説によって与えられるものではない。又經の由来を明かす因縁は一經が成立するに當つて初めて必要となるものであるから經の内容そのものではない。そこで教説の内容を構成するものは本事本生譬論優婆提舍經の四部經のみとなる。しかるに因縁譬論言辭という表現において、本事と本生が因縁のなかに含まれるとすれば言辭は優婆提舍經に當るのではないかと思う次第である。

⑦ 縁起を意味する場合。 **Dependent origination**. 一切の存在はすべて因縁によって生じ因縁によって滅する。縁起とは因縁によって生ずることをいう。十二因縁は凡夫の生存が十二の條件によって成立つことを意味するから十二縁起ともいう。従つて譬論品の樂獨普寂深知諸法因縁是名辟支佉乘の因縁は単に **causes** とするよりも **dependent originatoin** とした方が妥当であるかも知れない。方便品の諸仏兩足尊知法常無性仏種從縁起の縁はこれを因縁と解し、從縁起を縁起と解して **dependent origination** とすべきであろう。

こゝで必然的に問題となるのは十二因縁の各支をいかに翻譯すべきかである。無明は **ignorance** とするのが通説のようである。

**stupidity** は痴の訳語とする方が適當であろう。行は **predisposition** とした。識は **consciousness** である。名色は **name-and-form** としたが、**the corporeal organism** という訳もある。六入は **the six sense-organs** が通説である。触は **touch** 又は **contact**、受は **perception** 又は **sensation** である。愛は **cravings** とした。これは渴受 **taṇhā** であるから **thirst** であるが、現在の英語の **usage** では **thirst** は渴愛の

意が薄れている。Love という訳語は不適當であろう。Love は単独に用いられる場合は多くは男女間の愛情を意味し、又キリスト教における神の愛を意味する。取は grasping, 有は becoming, 生は birth, である。老死は age-and-death とした。

次に問題となるのは十如是の訳である。相は形相であるから appearance としたが、相が常に形相を意味するとは限らない。性質を意味する場合もある。その場合は nature となる。又同じ形相でも形そのものに重点が置かれる場合は form が適當であろうし、様相を意味する場合は mode 又は state が適當であろう。性は nature である。体は主体、実体、本体と解釈して substance を用いた。力は power, 作は activity, 因は primary cause, 縁は environmental cause, 果は effect である。報は reward-and-retribution とした。reward は善報を意味し retribution は悪報を意味する。善悪を包含する報に該当する英語はない。

本末究竟等は本の相から末の報に至る九要素が凡て実相であるという点において等しいと解釈した。しかしかかる意味を表現するのに適當な英語はない。そこでこの解釈は脚註で明らかにすることとし、本文ではすべての存在の差別相は以上の九要素について知るべきであるということを示すために本末究竟等に当る部分に particularities という表現を用いた。如是は as they are である。諸法実相は the reality of all things とした。諸法を all things とするのは物足りない感じがしないでもないが、panta rheiの英訳が all things flow というように決定されていることから考えれば適當でないとはいえないと思う。